

## A-2 サンスクリット文献『シャタパタ・ブラーフマナ』における非従属節化<sup>1</sup>

張 倩倩 (チョウ セイセイ)

zhangqianqian1011@gmail.com

### 要旨

非従属節化(*insubordination*)という概念は Evans (2007: 367)が「慣習化されている、一見して形式的に従属節のように見えるものの主節用法」という定義のもとに提唱した現象で、多くの言語でその存在が報告されている。本発表はインドの古典語であるサンスクリット語で書かれた前 8-6 世紀頃のヴェーダの釈義書『シャタパタ・ブラーフマナ (以下 ŚB)』をテキストにする。また、ŚB における単独で用いられる *yád* 節が非従属節化であることと、非従属節化の理論は通時的变化にも応用できることを主張する。主として挙げられている理由は以下の三つである。①単独で用いられる *yád* 節は全て「～ことについて述べる」という独自の意味を持つようになっている。②関係詞 *yád* のまとまりが一文であると判定できるアクセント表示が存在する。③このような *yád* 節の用例が、文頭に現れた *yád* 節の合計 413 例中 243 例を占めるため、生産性があると考えられる。

### 1. はじめに

サンスクリット語の従属節のうち、関係節は *yad* (*that, who, what, which*)、*yatra* (*where*)、*yadā* (*when*) など *ya-* という形態素をもつ関係詞を用いて表される。そのうちでも、*yad* は主に事実を言い換える。特にその事実が主文に関する重要な要素である時、例えば、主語と目的語であるときに *yad* の従属節で表すことが多い(Speijer 1886: 358)。また、Delbrück(1888: 344, 573-582)によれば *yad* は *when, if* を表す用例もある。( *yad vai vāyuh parān eva paveta kṣīyeta. (Jaiminīya Upaniṣad Brāhmaṇa 1.1.2.5)* 「もし風が東向きにのみ吹くのならば、消えてしまうでしょう。」)サンスクリット語の従属節の特徴は、古い時代のインド・ヨーロッパ語族の多くの言語と同様に、従属節内部で関係詞を用いるのみならず、主節にも指示代名詞を用いて相関(*correlative*)させる場合が多いということである。例えば以下のような例が挙げられる。

(1) [yó	rāyò	'vánir	mahān
REL.PRON.NOM.SG.	wealth-GEN.SG	stream-bed-NOM.SG	great-NOM.SG.
supārāḥ	sunvatāḥ	sákhā ]	
easy to be crossed-NOM.SG.	soma-presser-GEN.SG.	comrade-NOM.SG.	
tásmā	indrāya	gāyata.	
him-DAT.SG.	Indra-DAT.SG.	sing-IMP.2PL	

(R̥g-Veda 1.4.10)

He **who** is a great stream-bed of wealth but easy to cross, the comrade of the soma-presser **to him**, to Indra, sing!  
(Jamison and Brereton 2014: 94)

<sup>1</sup> マクロン付き母音は長母音、下点付き子音 (<ṣ>等) はそり舌音、<ś>は無声歯茎硬口蓋摩擦音、<ṁ>は閉鎖のない鼻音、または直後の子音と同じ調音位置をもつ鼻音 (文末では[m])、<ḥ>は直後の子音と同じ調音位置をもつ無声の摩擦音 (文末では[h]) をそれぞれ表す。

しかし、紀元前 8~6 世紀頃のヴェーダの釈義書 *Śatapatha-Brāhmaṇa* の中には、関係詞 *ya-* の中性単数主・対格形 *yád* が主節を伴わずに単独で現れる例が見られる<sup>2</sup>。以下の例文(2)が例としてあげられる。

(2)[ <i>yád</i>	<i>v</i>	<i>evá</i>	<i>vaisarjináni</i>	<i>juhóti.</i> ]
REL.PRON.NOM.SG.	on the other hand	indeed	Vaisarjina-ACC.PL.	offer-PRS.3SG.
<i>yajñó</i>	<i>vái</i>	<i>viṣṇuḥ.</i>		
sacrifice-NOM.SG.	VAI	Vishnu-NOM.SG.		

(ŚBM 3.6.3.3)

*And again, why he performs the Vaisargina offerings. Vishnu, forsooth, is the sacrifice. (Eggeling 1885 vol 2:155)*

この *yád* の節が直後の節から独立した一つの文とみなすことができる根拠は、統語と意味の 2 つの側面から挙げられる。統語的根拠としては、アクセントを持つ接語である *vái* が直後の文に現れるという点である。さらに、意味的根拠としては、*vái* は新しい話題を提示する際に用いられる小辞だ(Macdonell 1916: 248)ということが挙げられる。このような観点から、“*yád v evá vaisarjináni juhóti.*”が独立した一文であるということが示唆される。本発表は *Śatapatha-Brāhmaṇa* におけるこのような独立した *yád* の節からなる一文が非従属節化の例であるのかを検討するとともに、この文の機能を記述することを試みる。

サンスクリット語の従属節あるいは関係節それ自体の先行研究は多いが、非従属節化という観点からの研究は今のところ存在しない。*ya-* の中性単数主・対格形である *yád* に関する研究としては Speijer (1886: 347-379)、Delbrück (1888: 554-634)、Apte (1925: 239)などが挙げられる。個々の文献における従属節の記述としては *Ṛg-Veda* に関する Hettrich (1988)の研究や *Śatapatha-Brāhmaṇa* に関する Durkin (1991)の研究が挙げられるが、どちらも非従属節化については言及していない。また、文中の要素の省略という観点からの先行研究としては Delbrück (1888: 7-11)ほか、古典期サンスクリットにおける省略について記述した Gillon (2010)等が挙げられるが、どれも複文における主文の省略については言及していない。

## 2. 非従属節化とは

非従属節化現象は多くの言語で見られる。例えば、日本語で「彼が来ますように。」という場合、この文は彼が来るという事象の容態を表す従属節ではなく、彼が来るという事象が起こってほしいという意味合いを持つ主節である。日本語学で「...から、...のに」のような接続助詞で終わる文を「言いさし」と呼び、既に白川(1991)、佐藤(1993)、白川(1996)、永田(2001)、白川(2009)、田(2016)、大山(2019)など多くの先行研究がある。通言語的にこの現象を扱ったのが Evans (2007: 367-370)である。Evans はこの現象を非従属節化と呼び、「慣習化されている、一見して形式的に従属節のように見えるものの主節用法 (The conventionalised main-clause use of what, on prima facie grounds, appear to be formally subordinate clauses)」と定義した。さらに、非従属節化に至るまでは (1)従属節、(2)主節の省略、(3)省略の慣習化、(4)主文構造への再分析という四つの段階があると述べている。最後の再分析の段階でこの構造は慣習化され、省略ではない主節として用いられるようになると主張している。

<sup>2</sup> *Śatapatha-Brāhmaṇa* には Mādhyandina 伝本 (ŚBM) と Kāṇva 伝本 (ŚBK) の 2 種類が存在するが、本研究では前者を底本とする。

### 3. Śatapatha-Brāhmaṇa における非従属節化

ŚBM の従属節は原則としては上記のサンスクリット語の一般的な関係節の作り方と同じで、ya-関係詞を従属節に用い、主節で指示代名詞が先行詞と一致して呼応する。一般的な関係節の例として ŚBM 1.1.1.9 が挙げられる。

(3) [śá	yád	evāśítám	ánaśitam ]
now	REL.PRON.NOM.SG	indeed-eaten-NOM.SG.	not eaten-NOM.SG.
tád	aśnīyād		
it-ACC.SG.	eat-PRS.OPT.3SG.		

(ŚBM 1.1.1.9)

[L]et him therefore eat what, when eaten, counts as not eaten. (Eggeling 1885 vol 1:5)

このような文が存在する中、(2)の文のように、主節のない *yád* の従属節が独立した文として現れる場合も多くみられる。前述した *vái* が直後に存在することを基準として判定した場合には、ŚBM 全 14 巻中 175 箇所節の初頭に *yád* 従属節の独立した文としての用法が現れる。さらに、*vái* が直後に存在しないが、従属節を独立した文として使用していると思われる例も 68 箇所で見られる。以下でそのうちの四例を挙げる。

(4) [átha	yád	átra	bahiṣpavamānéna	stuvate.]		
then	REL.PRON.NOM.SG	here	Bahishpavamana-INST.SG.	praise-PRS.3PL.		
átra	ha	vá	asāv	ágra	āḍityá	āsa
here	indeed	VAI	that-NOM.SG	foremost-LOC.SG	sun-NOM.SG	be-PERF.3SG

(ŚBM 4.2.5.9)

And as to why they chant the Bahishpavamana here (near the catvala). In the beginning, forsooth, yonder sun was here on earth. (Eggeling 1885 vol 2: 309)

(5) [átha	yád	aṣṭā-kapālo	bhāvati.]
then	REL.PRON.NOM.SG	eight-potsherds-NOM.SG	be-PRS.3SG
aṣṭākṣarā		vái	gāyatrī.
eight-syllables.NOM.SG		VAI	Gayatri.NOM.SG.
gāyatrī	vá	iyám	pṛthivy.
Gayatri-NOM.SG	VAI	this-NOM.SG.	earth-NOM.SG.

(ŚBM 5.2.3.5)

And as to why it is a (cake) on eight potsherds. – the Gayatri consists of eight syllables, and this earth is Gayatri. (Eggeling 1885 vol 3: 44)



(9) [yád	atihṭya	sādāyed.]		
REL.PRON.NOM.SG	carry over-CVB	sit-CAUS.PRS.OPT.3SG.		
ásti	vá	agnés	cāpām	ca
be-PRS.3SG	VAI	fire-GEN.SG	and-water.GEN.PL	and
víbhṛāṭṛvyam	iva.			
hostility-NOM.SG	like			

(ŚBM 1.1.1.21)

「運び越してから座らせる場合について。火と水には敵対心のようなものがあるのだ。」

サンスクリット語では主文の定動詞は「文頭にあるとき」、「後続する文と対比される時」、「従属節の中」という三つの場合以外ではアクセントをもたないため、もし(9)全体が一文であるならば *ásti* ではなくアクセントのない *asti* となるはずである。したがって、(9)は二文に分けて読まなければならない。

- ② 意味的に独立し、特殊な意味を持つようになった。例としてあげられている(4)、(5)、(6)、(7)、(8)、(9)の文をはじめとして、すでに述べた祭式行為の詳細を説明する際に用いられる。そのため Eggeling の訳は 'as to' となることが多い。日本語では「～であることについて」と訳することができる。例えば、(6)を含む節全体は以下のように解釈することができる。「24 音節であることについて (題目)。ガーヤトリーは 24 音節であるのだ (話題の提示)。アグニはガーヤトラである。アグニがどれほど偉大であるのかというのと同じ程度に、そして彼の規模がどれほど大きいのかということと同じ程度にそれを燃やすということになる。」したがって、これらは題目の提示という主文の省略された従属節以上の慣習的な意味を持つようになったと思われる。
- ③ 用例の量的にも多く、少なくとも ŚBM の範囲内では生産的な構文であり、慣習化されていると思われる。上述したように、合計で 413 例中 243 例がこの構文の用例に当たる。

問題となるのは、上述した文がどの程度非従属節化した構文として確立されているのかという点である。Evans (2007: 374)は、主節構造として再分析された (即ち、完全に非従属節化した) 文においては省略された内容は復元不可能であると主張している。しかし、(9)の文の場合には「運び越してから座らせること[について述べる]。」というような主節を復元することが不可能ではない。例えば、例(10)のように復元することができると思われる。

(10) [yád	atihṭya	sādāyed.]	(tád	bravīmi.)
REL.PRON.NOM.SG	carry over-CVB	sit-CAUS.PRS.OPT.3SG.	PRON.NOM.SG	say-PRES.1SG.

(ŚB 1.1.1.21)

「運び越してから座らせること(、それについて述べる)」。

しかし、(9)の文の場合に、「運び越してから座らせること[を実行しなさい]。」ではなく、「運び越してから座らせること[について述べる]。」という形に復元方法が固定されているという点が重要であると考

えられる。Narrog (2016)は日本語の非従属節化において解釈が固定されている場合を *closed insubordinates* と名付け、ŚBM の非従属節化もそれに属すると考えられる。しかしながら、例文(10)のような復元の例は ŚBM においてほぼ見られない。例文(9)のような *yád* 節だけで話題を提示し、一つの主文のような振る舞いをするが多いため、省略は慣習化されていると思われる。したがって、サンスクリット語のこの *yád* 節の用法は一見して従属節だが、主節として扱っていると考えられる。

#### 4. 結論と今後の課題

サンスクリット語文献 ŚBM において Evans (2007)で提示した非従属節化の現象があると考えられる。また、ŚBM の非従属節化した *yád* 文は構文自体が題目の提示という意味を持つことがわかった。非従属節化の概念は現代語に止まらず、通時的変化にも応用できると考えられる。

例文(4)、(5)のように、*yád* 節の前で「そして」の意味を表す *átha* が出てくる場合があるが、ŚBM の時代的に新しい部分、すなわち 10 巻以降において、例(11)のように *yád* が省略され、*átha* だけで *yád* 節と同じ意味を表す例が初めて出てくる。Speijer (1886:333)は *átha* には新情報の提示と新しい文の付加の機能があると述べている。また、ŚBM に属するヴェーダサンスクリット語の後の段階の古典サンスクリット語では *atha* は条件文を導くことも可能になった。*átha* は単なる文と文の繋がり of 接続詞から、従属節の関係詞という役割を持ち始めた文法変化を ŚBM から窺い見ることができると考えられる。

(11) [ <i>átha</i>	<i>átaś</i>	<i>yajñásya</i>	<i>sámṛddhiḥ.</i> ]	<i>yád</i>	<i>vaí</i>
ATHA	hence	sacrifice-G.SG	success-N.SG	REL.PRON.NOM.SG	VAI
<i>yajñásya</i>	<i>nyūnam</i>	<i>prajānam</i>		<i>asyá</i>	<i>tád;</i>
sacrifice-G.SG	deficient-ACC.SG	production-ACC.SG		this-M.G.SG	that-N.SG
					(ŚBM 11.4.4.8)

*Then as to the successful issue of the sacrifice. Now, whatever part of the sacrifice is incomplete the part of it is productive for him;* (Eggeling 1885 vol 5: 67-68)

#### 参考文献

- Apte, Vaman Shivaram (1925) *The student's guide to Sanskrit composition: being a treatise on Sanskrit syntax, for the use of schools and colleges*. 9th edition. Girgaon, Bombay: The standard publishing company.
- Cristofaro, Sonia (2003) *Subordination*. Oxford; Tokyo: Oxford University Press.
- Delbrück, Berthold (1888) *Altindische Syntax*. Halle: Waisenhauses.
- Durkin, Desmond (1991) *Konditionalsätze im Śatapathabrāhmaṇa*. Wiesbaden: O. Harrassowitz.
- Evans, Nicholas (2007) Insubordination and its uses. In Irina Nikolaeva (ed.), *Finiteness: retical and empirical foundations*, 366-431. Oxford: Oxford University Press.
- Evans, Nicholas and Watanabe Honore (2016) The dynamics of insubordination: An overview. Nicholas Evans, Honoré Watanabe edited. *Insubordination*, 1-37. Amsterdam: John Benjamins Publishing.
- Eggeling, Julius (trans.) (1885) *The Śatapatha-Brāhmaṇa: according to the text of the Mādhyandina school*. Oxford: Oxford University Press.
- Gillon, Bredan S. (2010) Linguistic Investigations into Ellipsis in Classical Sanskrit. *Sanskrit Computational*

- Linguistics. 4th international symposium, New Delhi, India, December 10-12, 2010: proceedings.* Girish Nath Jha (ed.) Berlin: Springer.
- Hettlich, Heinrich (1988) *Untersuchungen zur Hypotaxe im Vedischen.* Berlin; New York: W. de Gruyter.
- Jacobi, Herman (1886) *Ausgewählte Erzählungen in Māhārāshṭrī.* Darmstadt: wissenschaftliche Buchgesellschaft.
- Jamison, Stephanie Wroth (1992) “Vedic ‘sá fige’: An Inherited Sentence Connective?” *Historische Sprachforschung* 105: 213-239.
- Jamison, Stephanie Wroth and Brereton Joel Peter (trans.) (2014) *The Rigveda: the earliest religious poetry of India.* New York: Oxford University Press.
- Speijer, J, S (1886) *Sanskrit Syntax.* Leyden: Brill.
- Macdonell, Arthur Anthony (1916) *A Vedic grammar for students.* Oxford: Clarendon Press.
- Narrog, Heiko (2016) Insubordination in Japanese diachronically. Nicholas Evans, Honoré Watanabe edited. *Insubordination* 247-282. Amsterdam: John Benjamins Publishing.
- Weber, Albrecht (1964) (ed.) *The Śatapatha-Brāhmaṇa in the Mādhyandina-Çākhā with extracts from the commentaries of Sāyaṇa, Harisvāmin and Dvivedānga, Varanasi : Chowkhamba Sanskrit Series Office.*
- 大山隆子(2019) 『日本語における「言いさし文」の統語論的構造および語用論的機能』博士論文, 北海道大学.
- 佐藤勢紀子(1993) 「言いさし「…が/けど」の機能—ビデオ教材の分析を通じて『東北大学留学生センター紀要』1 東北大学留学生センター, 39-48.
- 白川博之(1991) 「「から」で言いさす文」『広島大学教育学部紀要第2部』9, 249-255.
- 白川博之(1996) 「「けど」で言い終わる文」『広島大学日本語教育学科紀要』4, 9-17.
- 白川博之(2009) 『「言いさし文」の研究』東京:くろしお出版.
- 永田良太(2001) 「接続助詞けどに関する言いさし表現の談話展開機能」『社会言語科学』3-2, 17-26.
- 田昊(2016) 『日本語教育文法における「言いさし」の研究』博士論文, 一橋大学.